緊急時の人間セキュアリティ: 震災後の 東京電力福島第一・第二原子力発電 所における労働衛生管理について

愛媛大学大学院医学系研究科 公衆衛生·健康医学 谷川 武

4月16-19日に最初の現地入り



衛生状態

職員は4勤2休のシフトの中でシャワーも使えず寝具は共用

このままでは皮膚疾患の発症、蔓延が危惧

睡眠不足、慢性疲労状態で作業を継続

ヒューマンエラーによる事故のリスクを高めることが懸念

疲労回復の重要性

衛生状態保全 疲労回復に 風呂・シャワーは 必須



疲労回復は、 昼間の最高の パフォーマンスを 発揮するためにも 重要

シャワーの設置や、二段式ベッド、生野菜支給などを提案

ストレスについて

4つのストレス

危険な作業 被災者 ストレス 肉親や友人 加害者 の死

想定外の反響

福島から戻った後、取材が殺到。

電力福島第1原発で復

危

に向けた活動を続け

の睡眠の質が悪すぎ

これでは作業に集 一。東京

「原発で働く作業員

表員は勤務4日、休日 現在、第1原発の作

原発で診察 谷川教授

眼

二の東電社員ら九十 原発の免験重要棟内の から話を聞いた。事故 仮設診療所で寝泊まり た。今回は十六日から 約二十年間、非常勤産 しつつ、福島第一と第 十九日まで、 業医として社員らの健 尿管理にあたってき に厳しい状況が続いており、早期の対策が くない」と話した。作業員にとって心理的 も被災者であり、 行教授はこれまで 不可欠だという。 しい作業に追われる上、休む場所がまった 大学院の谷川武教授(四と)=公衆衛生学=が 京電力社員らの心理的状態を調べた愛媛大 十九日、本紙の取材に応じ、「社員の多く 福島第一 家族が避難所にいる。厳 れたり、誹謗中傷を受 と言われながら指ささ の避難所で、 続けている。 あることから「申し訳 を起こした東電社員で いたという。 けたと吐露した社員も ない」との思いを抱え 家族とくつろぐはず

谷川教授は「彼らに 避難所 いる避難所 びきの大きな人に治療

長期にわたる心のケア も拡充し、 高まる」と指摘。 「ストレスの緩和や

早急に取り組まなくて 画的な健康管理体制を 被ばく対策を含めた計 が必要だ。医師の応援 はならない」と話した。 ストレスや

災者だ。震災発生直後

避難指示区域に住む被

は、家族の安否確認も

われ、激務をこなして も津波や地震対策に追 した。第二原発の社員

いるという。

福島第二原発の体育

上も家に帰れず、長時 できないまま、十日以

间の厳しい作業をし

た。この間、床や椅子

が敷き詰められ、その 館には畳四百五十六枚 自宅を失っていたり、

が隠せない状態」と話

社員自らが、

家族や

いるが、さすがに疲れ

のは初めてだった。

死に物狂いで頑張って

でも休む場所がない

対策で専門家が入った 後、社員らのストレス

は発電所でも、

から福島第1原発の非 | かない上、 風呂やシャ

れていない」としている。

常動産業医として健康一ワ

福島第二原発の体育館で、 をする作業員ら=谷川武教授提供 しのぐため防護服を着て眠る準備 寒さを

が続く。 束への工程では、うま や脳卒中など循環器系 スがかかると、うつ病 慢性的なストレス状態 谷川教授は「今後は、 緊張した作業が続く。 善を図った。 を施し、睡眠環境の改 の疾患の発症リスクが くいっても半年以上の 東電が示した事故収

長期にスト

の元に帰っても、 を取って避難所の家族 験を打ち明けた。休み に避難所でのつらい体 で眠る生活が続いた。 社員らは、谷川教授 患者のすさまじいいび で眠る。夜、谷川教授 ら二百人が寝袋や毛布 上で第一原発の作業員 睡眠時無呼吸症候群の が巡回すると、 重症の

口寝。SASの患者は七作 O枚敷き詰めて雑食 は第2原発内の体育館 集中力をそぎ、ただで を落としかねない」と とないびきをかくた とないびきをかくた となるばかりか、周囲のい たるばかりが、周囲のい 計な現場 ニューズにする。メーカントラーズにする。メーカンルで気道を広げ呼吸をスプラーズにする。メーカンルで気道を広げ呼吸をスプラーズにする。メーカントラーズによりまする。メーカントラーズによりまする。 に出向き、大きないび教授は夜間、体育館

(向井秀則)

答は次の通り。 に会い、再会を約束して 第1原発の所長と1月 一診察のきっかけは。

高族 に え

谷川教授一問一答

S) だった.

懸命の作業に影を

信療器具の説明をする谷川武教授(いきを知らせる書面を手元に置

元に置き、作業員に

摘。教授の専門が睡眠 睡眠状態の悪さを指 大大学院医学系研究科

災者。原発近Vの家が流 作業員の8、9割が被 患者を診てどう思っ

かった。自分のほかに女

なかったか。 線にかり出され

確な被ばく量は分からな か。大きな余震が起きて、

2011年(平成23年)4月21日

にものを急きょ持ち込ムーズにする。メーカムーズにする。メーカ

で回った。4日間の診は 療を勧める書面を置い は、意をかいている人に治

装着する人も(手前)=13日(谷川武教授提供福島第2原発の体育館で寝泊まりする作業) 2作業員。中には睡眠時無呼吸症候群の治療器具を

災者でもある作業員のスト 業で極限状態」と述べ、 (4面に関連記事)

員を取り巻く環境は鬱 食め計約9人を診た。 被害を受けた北約12%

能性がある」と危惧し

島に入る予定という。 おいる。 mer con"

>「愛媛新聞リポ 映像版は愛媛CAT

ろから放送します。

で3日午後8時2分ご

2日、帰した。数ほ「被 要賞の確保や十分な休息の必 スは際限ない労働と危険な作 (49)二公衆衛生学―が診察し 医学系研究科の谷川武教授 員を、産業医で愛媛大大学院 の復旧活動などに当たる作業 京電力福島第1、第2両原発 愛媛大·谷川教授 曺古大震災で被災した東

せ、現地と連絡がつい

的被害が小さかった第一放射性物質を洗い落と

「入浴は体に付いた

らも環境の悪さが自に

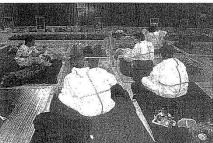
の第1原発の作業員を 診察等を置き、大きな 摘。 毛布や寝袋も 整によると、集 原発の免疫棟に仮設 うれば、まん延する可 人が皮膚病などを発症

い表劣悪。 仕事があるから大丈 谷川教授は「『今は

大』と話す作業員もお くても、慢性的なスト レスは看過できない。

ベルだ。休暇が絶対に 月上旬にも再び福 (南井寛)

2011年(平成23年)4月20日 毎日新聞 を訴える人も多く、このま スクがいっそう高まる」 まではうつ病や過労死のリ 通信の取材に応じ、「不眠 医学部教授の谷川武医師 人浴や食事の環境を 公衆衛生学



社員や作業員=16日、谷川武医師提供

福島第2原発の体育館で寝泊まりする東電

整え、休息が取れるよう配 的ケアが必要だという。 慮すべきだと訴えた。 常勤産業医。今月16日から ら福島第1 いる人もおり、早急に精神 の四重のストレスを感じて 「肉親や友人の死」「加害者」 谷川医師は1991年か 危険な作業」「被災者」 第2原発の非 間は入浴できない。 除染し、第2原発の敷地内 勤2休」のシフトで、4日 にくるまる。幹部以外は「4 館で雑魚寝。畳の上に防寒 にある500人収容の体育 谷川医師は「通気性のな

トを敷き、毛布と寝袋

日に現地で診察した愛媛大 京電力社員約9人を16~19 福島第1、第2原発の東

く。疲れも取れず、病気やい防護服は大量の汗をか

ねない」と懸念する。 でなく、作業ミスも生みか 皮膚疾患になりやすいだけ

そ ろ、危険な作業の重圧に加 約30人を問診したとこ 「家族に『行かない など強いストレス 谷

った人もいる。一方で『加いがあり、中には家族を失 以上が原発20世圏内に住ま 3 川医師は「現場社員の8割 がうかがわれたという。 活しているが、住民から厳 害会社に勤めている」との しい視線にさらされて を失い、休日は避難所で生 で』と言われている」 診察の医師 ケア早く

> になったが、缶詰やレト 止されていた人もいた。

食品が中心だという。

原発で作業を終えた人は

といい、谷川教授はい

く眠れていない状況」

びきで他の作業員がよ

きが響く。

「強烈ない

ながら診察した。

福島第一原発で事故処理作業にあたる東

原発で産業医が

聞き取

ij

の免農重要棟に寝泊まりし 4日間にわたり、第2原発 中には24時間態勢で作業 一時、外出を禁

The Japan Times



Depression, stress, poor sanitation, diamdoctor

Nuke workers at risk of overwork death

YODO

Fokyo Electric Power Co. workers engaged in efforts to stabilize the crisis-hit Fukushima No.1 nuclear plant are at risk of depression or death from overwork, a doctor who recently examined them said Wednesday.

The workers are not only undertaking dangerous work in severe conditions but also feel a sense of moral responsibility as employees of the operator of the crippled plant, Takeshi Tanigawa said in an interview.

Many of the workers have

been exposed to multiple stresses, he said, as some of them barely survived the March 11 quake and tsunami, as well as subsequent hydrogen explosions that wrecked the plant's reactors, while others lost their homes or saw kin or friends die.

"Many are complaining of difficulty sleeping and the risks of depression and death from overwork will rise further if this goes on," the doctor said after examining some 90 Tepco workers from Saturday through Tuesday at the nearby Fukushima No. 2 plant.

22

Full-body exam: Dr. Takeshi Tanigawa, who has been an industrial physician for two Fukushima nuclear plants since

Some were also worried about radiation exposure and its long-term effects on their health, he added.

Tanigawa, a professor at Ehime University School of Medicine, has been a part-time industrial physician for the two Fukushima nuclear plants since 1991.

At the end of each day, workers are decontaminated and go to the Fukushima No. 2 nuclear plant some 10 km south to sleep on the floor of a gymnasium in sleeping bags with blankets. There are tatami mats on the floor and a sheet to insulate them from the cold, he said.

Among the workers was one engaged in work around the clock without being allowed to go out at one point, he said.

The workers are also on a poor diet, centering on canned and retort-packed foods, aithough they can now have three meals a day, up from the initial one daily.

Workers other than senior officials work in shifts of four days on and two days off, but cannot even take a bath during the four workdays despite sweating heavily in impervious radiation-protective gear, Tanigawa said.

"Being unable to feel refreshed, they are not only vul-

Downtime: Tokyo Electric Power Co. employees sit on the floor of a gymnasium at the Fukushim are staying while they work at the nearby No. 1 plant. COURTESY OF TAKESHI TANIGAWA/KYODO

skin disorders but also may commit errors in their work," Tanigawa warned.

Through interviews with about 30 of them, Tanigawa found that they are heavily stressed not only as a result of the pressure of their jobs but also by being asked by family members not to go to work.

One worker whose home was lost in the disaster felt exposed to negative perceptions in a

days off, the doctor said.

"More than 80 percent of the on-site employees have their homes within a 20-km radius of the nuclear plant and some of them have lost family members," he said, adding that concerns about their houses and lives will likely continue to distress them. "It was also stressful for some workers who were unable to confirm the safety of families for as long as a week to

the other hand, they tend to fe indebted for working for an o fending company and so cannot raise their voices."

About 50 of the workers we diagnosed with illnesses such a high blood pressure and cold cluding one worker whom I instructed Tepco to replace duto a high fever, he said.

As the crisis continues, wi Tepco aiming to stabilize dar aged reactors in about six



12品目のサラダ

レタスやパプリカ

工年月日 2014 05.05 2011.05.08

DON' THE

キャベツ: 底界島県 レッドゲーフレクス 茨城県

05450000 美城県 ケリーフリーフレタス: 美統弘 紫玉ねぎ 米国産 **市丁州赤 被国**居

> トレビス:米国産 27 (792 北海道

パブ 野黄 韓国権

製造所與有限号 52

Fresh Salad, Fresh Life

FLのシングは別売りです。

5月6~5月9日 6月28日~7月1日 7月23日~7月25日 に引き続き健康管理を支援

大きないびきにより安眠妨害

安全に業務を遂行するためには、良質かつ十分な時間の睡眠を確保することが必須

福島第一職員の多くは福島第二の体育館の床に畳、シート、マットを敷きつめた上、毛布・寝袋で雑魚寝

夜間巡視で、重症の睡眠時無呼吸症候群(SAS)患者による強烈ないびきにより、睡眠を妨げられている状況が判明

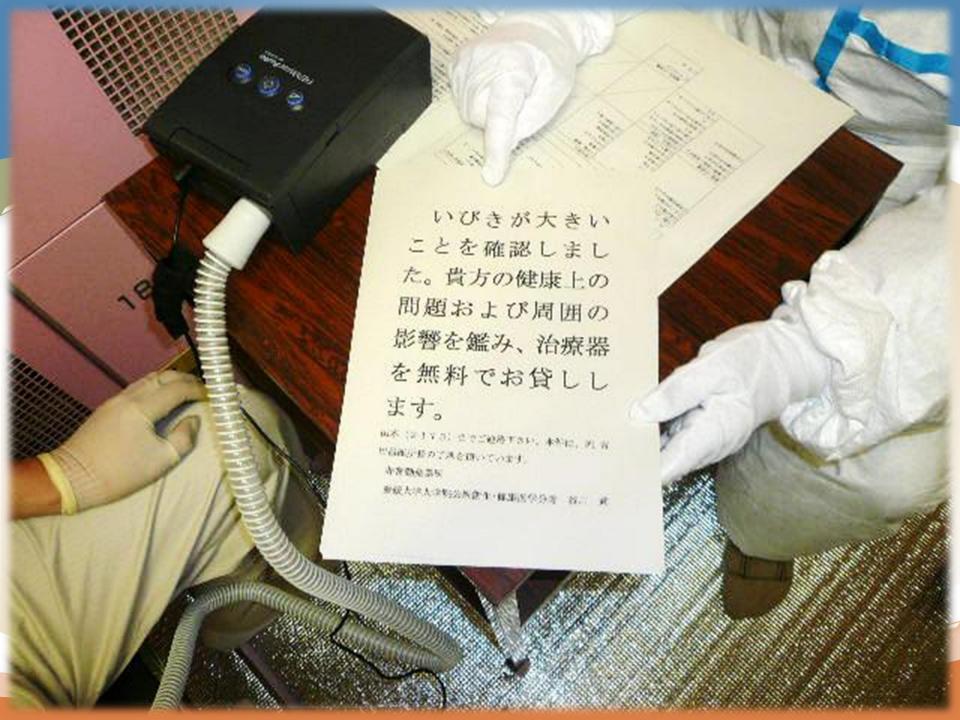
いびき対策

治療器(持続陽圧呼吸療法,CPAP)の提供を受け、震災前にCPAPを使用していた2名に装着

翌日面談した結果、熟睡できて疲労も回復したとの感想

SASが強く疑われる大きないびきを発している方々にCPAP治療を 実施

5月26日時点で25名がCPAPを装着中



現在までの到達点

衛生状態保全 疲労回復に 風呂・シャワーは 必須



疲労回復は、 昼間の最高の パフォーマンスを 発揮するためにも 重要

シャワーは設置され、生野菜も毎日二食つき、 仮設住宅も建設(一部入居)

敬意とねぎらい

Thank You!